

はじめに

日頃より、豊田市矢作川研究所の調査研究ならびに諸活動に対し、多大なるご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。そして当研究所が年に一度発刊する年報「矢作川研究 No. 30」をお目通しいただきありがとうございます。本誌は、当研究所の研究成果や活動報告とともに外部の方から投稿頂いた多角的な原稿を掲載しています。多くの皆様に活用して頂き、ご意見等頂ければ幸いです。

昨年も気候変動の影響からか、台風や降水量時間 100 ミリ超えの局地的な豪雨が全国で頻発し、各地での被害の様子がマスコミ等で報道されました。そのうえ夏の猛暑日が過去最高を記録する等災害級の猛暑ともいわれました。人々の生活とともに生物の生息環境の変化や生態系への影響が心配されます。

矢作川の状況は、例年に比べ梅雨明けが早く降水量が少なく渇水も心配されました。また台風や大雨による一時的な洪水は発生しましたが、甚大な災害や長期にわたる増水や濁水の発生等もなく、概ね良好でありました。そのような中、当研究所の生物指標とするアユの成長状態も大変良く、良型のアユがよく釣れ、釣り師からは「ここ 10 年で最もいい状況」と好評で、多くの釣り師が入川していました。以前から矢作川では大量遡上の年は魚体も小さく釣果が良くないと言われています。矢作川漁業協同組合の報告によると、一昨年の明治用水頭首工での天然アユ遡上数は約 550 万尾、昨年は約 100 万尾とされています。川によるアユの適正密度があると言われますが、その年々の川の環境の状態なのか、遡上アユの特性なのか、その他の複合的な要因があるのでしょうか。安定した釣果が継続されるよういち釣り師の研究所長として遡上数の多寡に一喜一憂せず、科学的に解明していく必要があると考えています。

そのほか、市民に川の良さや魅力を知ってもらうための環境学習やイベント等は当研究所の重要な活動ですが、暑さ指数（WBGT）により夏の野外活動ができなくなっています。特に子どもにとって川に入り生き物と触れ合う体験は、地域の川への愛着や自然環境を考えるうえで重要な機会となるため、開催時期や方法を考えていく必要があります。

今後も様々な課題に対応しながら、地域に根ざした研究所として科学的なデータに基づく成果を提供して、関係の皆様とともにより良い河川環境の創造に取り組んでいく所存であります。引き続き当研究所の活動に対し、皆様からのご支援、ご協力を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

令和 8 年 1 月

豊田市矢作川研究所 所長
宮田 昌和